



野田裕示《WORK 1666》2006年 個人蔵  
「なつやすみの美術館 11 野田裕示「集まる庭」より

## 「保存」の話をしよう。

### ⑱ 試されるとき

試されることは、試験や試合など避けて通れないものです。学校ではとくに多いのですが、学校を卒業して、仕事を始めてからもその機会はたくさんあります。

当館もそのひとつである博物館施設で、文化財保存の仕事をしている者にとっても試される機会はあります。文化財害虫がいないかどうか調べるトラップによる調査も、空中に菌類が浮遊していないか調べる調査も、温湿度の計測も、当館の保存環境が適当であるかどうかをつねに試しているのです。

試して、改善のための対策を立て、それで良くなったのかまた試して、という繰り返しをしていますが、いつになってもどきどきします。さらにどきどきするのは、「ファシリティ・レポート」を提出するときです。ファシリティ・レポートとは、当館の作品の取り扱い全般についての報告書で、所蔵者に展覧会への所蔵作品出品のお願いをするとき、必要になります。

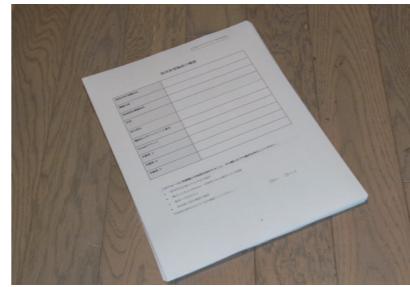
今年度、当館では「和歌山の近現代美術の精華」展を開催します。和歌山にゆかりがあり、日本の近現代美術史に足跡を残した作家たちを紹介する展覧会で、当館には所蔵さ

れていない名品を各所蔵者へあててご出品のお願いをしています。展覧会へご出品して下さるといことは、その作品の保存を当館に一時ゆだねていただくことにはかなりません。ファシリティ・レポートは、安心して任せられるかどうかを、所蔵者が判断するための情報をまとめたものです。

あらためて全体を見ると、まず担当者や連絡先を記しますが、そのなかには館の代表者や展覧会の企画担当者だけでなく、保存担当者の明記も求められます。いままでも当館が、どのような規模の展覧会を開催してきたのか、輸送や展示にあたる業者はどこか、鍵などの取り扱いが誰が行うか、搬入口の大きさやエレベーターなどの仕様、建物の構造や消防や防犯の設備、警備の契約も報告します。

作品を損なう規模の大きさでは天災、火災、事故、盗難などが深刻ですが、げっ歯類(ネズミなど)や害虫、微生物発生について、日頃の駆除や燻蒸について、展示予定場所、作品保管場所の温湿度、照明などの報告事項もあります。個人的には力が入るところですが、こうして揃えた報告書は53頁、なにを報告すれば所蔵者が判断できるのかを、ア

図面などの添付資料も合わせて束にするとこのくらい



メリカ博物館協会の様式をもとに、多くの学芸員が考えた成果です。

作品の出品が許され、無事に拝借し、ご返却できるように願いつつ書類を作っていると、設備や防災・防犯などにあらためて関心が向き、他館を訪れたときにも、妙なところをじっと見るくせがついてしまったことを思い出しました。

感染症の心配はまだなくなりませんが、美術館は比較的人との距離を取りやすい場所です。全国から集まった素晴らしい作品に会っていただけますように。(植野比佐見)



エントランスで報告書を並べてみました

## Museum Calendar

開館/9時30分～17時00分(入場は16時30分まで)  
休館/毎週月曜日(祝休日の場合は開館、翌平日休館)

8.15(日)～10.10(日)  
コミュニケーションの部屋



野田哲也  
《日記 1971年5月15日》  
1971年 当館蔵

10.23(土)～12.19(日)  
和歌山県誕生150年/紀の国わかやま文化祭 2021  
特別連携事業  
和歌山の近現代美術の精華



川端龍子《雷雨》1936年 当館蔵

2022.1.8(土)～1.23(日)  
コレクション名品選

2022.1.12(水)～1.16(日)  
第75回和歌山県美術展覧会(県展)

2022.1.19(水)～1.23(日)  
第7回和歌山県ジュニア美術展覧会(ジュニア県展)

2022.2.5(土)～3.27(日)  
20世紀からおみやげ。近現代美術のたのしみ

2022.2.8(火)～4.17(日)  
コレクション展 2022-冬春  
特集 若き日の野長瀬晩花

10.1(金)～10.24(日)  
おでかけ美術館 野田裕示展  
橋本市教育文化会館(橋本市)

メールマガジン  
Facebook twitter ご案内

メールマガジンでは展覧会の情報はもちろん、講演会、トーク、ワークショップなど当館に関連するタイムリーなトピックスを定期的にお届けしています。当館ウェブサイトよりご登録いただけます。またFacebookやtwitterでも、最新の情報を発信しています。あわせてご利用ください。

友の会 会員特典いろいろ

1. 展覧会の無料観覧
2. 各種行事への参加(美術鑑賞ツアー、ミュージアムコンサートなど)
3. 展覧会のご案内、美術館ニュース、その他情報の配布
4. 版画の頒布会への参加
5. 当館ミュージアムショップでの割引
6. 館内カフェでの割引
7. ホテルアパローム紀の国、湯処むろべ、和歌山マリーナシティホテルでの割引

入会のご案内

一般会員 6,000円  
学生会員 3,000円

ミュージアムショップにてお手続きいただけます。会員証即日発行。郵便振替でもお申し込みいただけます。詳しくは友の会事務局まで。  
Tel.073-436-8690 担当:中川



# なつやすみの美術館 11 野田裕示「集まる庭」

会期：2021(令和3)年7月17日～9月26日

日本の詩歌の歴史には、連歌や俳諧という分野がありました。参加者が交互に句をつなぎ、時に競いあうなかから生まれてきた形式に、付句というものがあります。と、書いたものの筆者自身はその方面にはまったく暗いのですが、「それにつけても金の欲しさよ」という句はどんな上の句もたちまち狂歌にしてしまう、便利な下の句だと教えられたものです。この付句を考えたのは室町時代末期の連歌師であった山崎宗鑑(1465?-1554?)なんだそうで、思った以上に昔から人はお金で苦労していたのだなあと感慨を深くします。

などということ考えたのは、今年の「なつやすみの美術館」展が、付句でつなげていくような展覧会だと思ったからです。

「なつやすみの美術館」展は、夏季休暇中の若い世代を中心に、美術に親しむきっかけとなってほしいと考えて計画しています。近年は、活躍中の和歌山ゆかりの芸術家を招いて、当館の収蔵作品と組み合わせで紹介してきました。

今回の展覧会に出品いただいたのは、御坊市出身の画家、野田裕示さんです。

1952(昭和27)年生まれの野田さんは、母校でもある多摩美術大学で教授を務め、昨年退任して名誉教授となっています。1977(昭和52)年、25歳の時に、当時現代美術を紹介する場として最も注目される場所であった南画廊での個展でデビューしてから44年、画家として第一線で活躍を続け、今年数えて70歳の古希を迎えます。若くして作家としての歩みを始め、弛むことなく制作を続けてきた野田さんは、これまでの制作を回顧する展覧会を開いても十分な量と質の作品を残しています。

2012(平成24)年に国立新美術館で開催された個展では、広い会場が大作で埋め尽くされている印象でした。

作品の題名を学生時代から「WORK」と通し番号でつけてきた野田さんの作品は、その時点で1766点を数えていましたが、さらに10年を経て、その数は2200点を超えています。単に制作された作品数が多いだけではなく、その制作には一貫性と多様な変化の双方を認めることができます。

絵画の形を問題とすることから、絵画という表現の方法を問い直していくという制作に向かう姿勢は、野田さんの制作を貫くものでしょう。木製の枠にキャンバス(厚手の麻布)を張り、そこに油絵具で描くという一般的な絵画の存在のあり方を問題とし、そうではない絵画のあり方の可能性を探ることによって、絵画という表現の本質を浮かび上がらせ、さらにその表現の枠を広げてきたのが野田さんの制作であると、取りあえずは言うことができるでしょう。

一般的な絵画のあり方とは異なりながら、なお絵画と認められる臨界点を探りながら進められるその作品は、箱のような形だったり、凹凸のある画面を布が包んでいたり、あるいは布が貼り付けられていたり、穴からのぞいていたりといった、多様な形状を取ってきました。時代によって試みられてきたかたちの多様さとともに、そこに用いられる色彩の豊かさ、野田さんの作品の特質となっています。

「なつやすみの美術館」展では、そんな野田さんの作品とコレクションを組み合わせることを考えたところ、野田さんからは、これまでに自分が実際に出会った作家の作品と組み合わせてみたいという提

案をいただきました。

画家は普通ひとりで作品の制作を行います。が、芸術家としての歩みはひとりだけでなされるのではなく、多くの芸術家とのふれあいを通じて学び、影響を受けながら進められていくものです。

野田さんも、和歌山県立日高高等学校で美術部に入学したことから美術を志し、進学した多摩美術大学、最初に個展を開いた南画廊をはじめ、さまざまな場で多くの作家を知り、実際に接し、影響を受けてきたことが、作品を並べて展示することで示されるでしょう。

現代の美術においては、作家同士の影響は直接見えるかたちに現れるとは限りません。作品の独自性が重要視される今日にあつてはむしろ、他の作家といかに異なる作品を生み出すかが問題となり、たとえ影響を受けたとしても、それをかたちとして表すことは避けられます。

今回の展覧会では、野田さん他の作家たちの作品を対にして展示していきました。当館の収蔵品に対して、野田さんは自作のなかから付句を連ねていくように作品を選び、更に全体の構成も時間軸に沿うのではなく、それこそ連歌を連ねていくように配置していきました。作品同士は造形的に似ていることで選ばれたものもありますが、そこには見た目の類似にとどまらない作品同士の応答を見出すことができましたのではないのでしょうか。時間軸を前後しながら、パッチワークとして全体の図柄を作り出すように配置された出会いの連鎖は、あるいはカート・ヴォネガット・ジュニアの『スローターハウス5』に没入するような体験に例えることもできるでしょう。

そのような展示に、野田さんは「集まる庭」という題名を与えました。展示室は、人が散策し作品と邂逅する場としての庭として現れ、そこでは歌が詠み継がれていくかもしれません。

現代の美術についての知識があれば、野田さんがいかに多くの芸術家と出会ってきたのかを再確認し、今日の美術を見る新たな視点を得られたでしょう。一方で、野田さんを含めて初めて作品を見て作家を知った方々にとっても、作家同士の出会いや作品同士の対話といったものを見出していただけたのではないのでしょうか。

個人的には、野田さんの最初の個展を訪れた瀧口修造さんとの写真に驚きましたが、それ以上に、多くの作家が既に鬼

野田さんからは、過去に出会った作家との関係を示す写真なども提供を受け、展示しました。初個展を訪れた方々の芳名録や、瀧口修造との写真などを御覧いただきました。



籍に入られていることに改めて感慨をいただきました。既に故人となった作家の作品に対しても、応答することで新しい関係が

生まれ、歌を詠むように鑑賞が続いていくことが示された展覧会となりました。(奥村泰彦)

## 3回目を迎える「芸術に親しもう! おでかけ美術館」

芸術に親しもう! おでかけ美術館 第3回紀北地方 野田裕示展  
会期：2021(令和3)年10月1日～10月24日、会場：橋本市教育文化会館

和歌山県では今年、「紀の国わかやま総文 2021(第45回全国高等学校総合文化祭)」と「紀の国わかやま文化祭 2021(第36回国民文化祭・わかやま 2021、第21回全国障害者芸術・文化祭わかやま大会)」という、文化に関わるふたつの全国的な催しが開催されることとなりました。このふたつの文化祭に向けて、県内各地で展覧会を開いて文化への関心を高めてもらおうと計画したのが、「芸術に親しもう! おでかけ美術館」です。

当館は、和歌山県の西北の端に位置する和歌山市にあります。活動の内容を

広く知ってもらおうにも、県内各地から来館いただくことが困難であることは否めず、県立の施設でありながら、県内全域からの来館を求めるには距離と時間という物理的な制約が大きいことは、如何ともし難い条件となっています。そこで、現在活躍する県出身の作家に協力いただき、美術館と県内各地で展覧会を開催しようと考えました。

2019(令和元)年から3年にわたって、紀南、紀北、紀中での開催を計画し、初年度は太地町、2年目の御坊市に続いて、今年紀北、橋本市で開催します。10月1日から24日まで、「なつやすみの美術館 11 野田裕示『集まる庭』」展で紹介している野田裕示さんの作品を、橋本市の教育文化会館をお借りして展示します。

「集まる庭」展では、当館の収蔵作品のなかから、野田さんがこれまでに出会った作家の作品を選び出して、野田さんの作

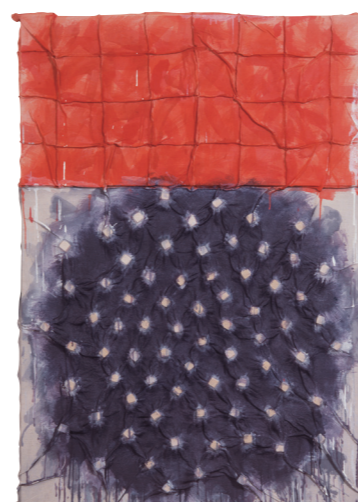
品と組み合わせで紹介しています。「おでかけ美術館」は、野田さんの個展として、1980年代から最新作まで、その制作の歩みをコンパクトに伝える内容となります。

野田さんは、日高高等学校在学中に美術への関心を高め、多摩美術大学に進学しました。在学中から積極的に同時代の芸術の動向に関わり、大学を卒業して間もない1977(昭和52)年に個展でデビューしています。以後、個展を中心に精力的に制作と発表を続け、常に新しい作品を世に問うてきました。

画面に凸凹があったり、袋のようだったり、あるいは箱のような野田さんの作品は、ぜひ実際に見てもらってその質感や大きさを味わっていただきたいものです。時代を追って変わってきた作品それぞれの違いと、そこに共通する野田さんならではの表現を探してみてください。(奥村泰彦)



会場風景



野田裕示《WORK 283》1986年 個人蔵



野田裕示《WORK 1667》2006年 個人蔵



野田裕示《WORK 2130》2018年 個人蔵

# 稗田一穂氏へのインタビュー

日本画家の稗田一穂氏（1920～2021）が、今年3月に100歳で逝去された。

当館では、1982（昭和57）年に特別展「稗田一穂展」を開催。現在では、本画と下絵合わせて36点を所蔵しており、和歌山出身の作家としてコレクション展や企画展でもたびたび紹介してきた。私が稗田氏と初めてお会いしたのは2015（平成27）年の企画展「ここだけの日本画」に際してのことで、翌年には熊田司前館長とともに再訪してインタビューさせていただいた。それから時間が経ってしまったが、今回できるだけすべての会話を書き起こした。本インタビューによって、作品や作家の背景を理解するために重要な情報はもちろん、戦中・戦後の日本の状況に関する証言も聞くことができた。稗田氏へ直接改めて感謝の意を伝えることができなかつたのが悔やまれるが、当館では今後もその画業の顕彰に努めていきたい。（藤本真名美）



稗田一穂氏、画室にて（2009年撮影）

## 2016（平成28）年4月7日、稗田氏自宅にて

語り手：稗田一穂／聞き手：熊田司（前館長）・藤本真名美（学芸員）

\* [ ] は編者の註記および補記

熊田：研究所〔阿部野橋洋画研究所〕に行っていたら、既に日本画に興味がおありでしたか。

稗田：いやいや、日本画っていうのは全然知らなかった。その当時の日本画っていったら、床の間にね、山水とか水墨画とか描いたものしかなくて。

熊田：特に大阪では帝展〔帝国美術展覧会〕とか見る機会がないから。

稗田：普通の中学よりか工芸学校〔大阪市立工芸学校〕の方が絵の時間が多いらしいというので。工芸学校は金属科と木材料と図案科と三科ありまして、図案科へ行きまして、そこではじめて日本画っていうのを習った（図1）。それまで油絵を習ってましたからね。ベタベタした絵具よりすうっと描けるようなね、こっこのほうが良いなと思ひまして。偶然ですね。

熊田：同じ時代に工芸学校の生徒さんではどんな方がいらっしゃいましたか。

稗田：工芸学校っていうのは実業学校でしたからね。学校出たすぐ世間ね、用立つような養成でしたから、上に行きたい言う人はほとんどいないです。

熊田：工芸学校を出てデザイナーとして大成した人ってけっこういますけれど、その頃はあまりご存じないですか。

稗田：あまりそう飛び抜けた人はいないですね。

熊田：赤松麟作先生には習われましたか。

稗田：赤松麟作さんは、週に1回3年以上になると洋画の時間に教えて。デッサンぐらいですけどね。特に親しく何かしたわけではないですね。〔当館から〕届いたNEWSの表紙の村井〔正誠〕さんの絵ね、僕ああいう絵は知らなくてね。僕あっちの方が好きだな。

\* \* \*

稗田：僕らのときは軍国主義の時代だったか

ら、絵描きになりたいと言ったら人間のクズのように言われて……小さいときから痩せてましたからね、奈良の壺坂に疎開していたとき、兵隊検査へ行行って、甲乙丙のうち「第三乙」と検査官から言われて召集対象にならなかった。普通「筋肉薄弱だ」といわれるけれど、「筋骨薄弱だ」と言われたね。だけど嬉しかったね。同級生で優秀なのに、戦死したものもいますからね。

熊田：徴兵検査というと、昭和15、6年頃、



（図1）《初夏の庭》1936（昭和11）年 当館蔵  
\*大阪府立工芸学校の展技部展への出品作、作者にとって初めての本格的な日本画作品

だいぶ後の方ですね。

稗田：昭和13年に入った頃かな。昭和18年に繰上卒業でね。よくテレビで紹介される大学生が鉄砲を担いで雨の中行進するのが、僕の一年下の話ですね。一年下はすぐ兵隊に取られている。学校でも、軽機関銃という小銃よりもちょっと重いのを担がされて、運動場を走らされましたからね。ここ〔腕〕が痛くて、それが終わってから絵を描こうと思ってもブルブル震えて、描けなくて。鉄砲持って練習することばかりだったね。

熊田：召集されずに済んで、本当によかったですね。

稗田：だけど、召集令状は来たんですよ。職に就かないとすぐ工場に引張られますので、上野の文部省美術研究所〔現・東京文化財研究所〕に勤めて、山形県の酒田市に疎開したんですよ。資料を運びに行くんで、本間家に倉庫借りて、そこから一時間ほど荷車で行ったところの村に疎開したんですよ。そこで食べたご飯、美味しかったですね。米どころで。そこで召集令状が来たんですよ。令状を受け取って奈良に行く途中でね。象潟から乗って、B29の爆撃がひどくて新潟の手前でずっと4時間ぐらい汽車で夜待っていて。新潟に明け方着いて、百姓のおばあさんが汽車に乗ってきて、涙ぐんでいるから「どうしたんですか」と聞いたら、「日本負けた」って言う。だから終戦の放送を聞いていないけれど、ああ、命助かったと。

熊田：美術研究所のときに、白畑〔よし〕さんと。

稗田：研究所にいたとき白畑さんが図書係で、その部下みたいなもんで。何もすることなかったですね。

熊田：所長は矢代〔英雄〕さんでしたか。

稗田：矢代さんは美術研究所の外客のような。だけど美術学校の講義で頭に残っているのは矢代さんぐらいですね。後の講義全然面白くなくて。美術研究所にいたとき倉田白羊の息子の倉田文作さんが好き持ってくれて、よく一緒にあちこち連れていってくれました。矢代さんの手下みたいな人で。軽井沢に外国人が軟禁状態で集まっていて、そこへ英語のできる矢代さんが美術史の講義に行くというので、倉田さんと一緒に講義する幻灯の絵のガラス板を持ってお供したんですよ。軽井沢寒くてね、映写する間にガラスが割れた。その翌日かな、軽井沢の熊ノ平ってところに散歩に行こうと矢代さん僕を誘ってくれてね。むこうのジオットの壁面のこととか歩きながら話されてね。ジオットの空の色がキレイだったとか。ああ、これはジオットの空みたいだ、とか。

熊田：チマブエとかフラ・アンジェリコとかは、矢代さんが元なんですかね。

稗田：矢代さんの講義が一番面白かった。

\* \* \*

稗田：でも学校出たから、吉祥寺に下宿しているとき、初老のおばさんで進駐軍の軍属の女の人の宿舎の舎監のようなことをやっている人がいましてね。僕に進駐軍で絵を習い

たいと言う人がいるからあんた教えるにいかないかと。僕、生活費も何にもないしね、引き受けたんだけど。語学もキライだったからね。英語もろくすっぽできない。だけどね、やっぱりね、人間困ったら何でもできるなと思っただけね。まさか僕あの英語しゃべって教えられるようなこと思いもよらなかったけどね。NHKの英会話、カムカム英語のテキストを買ってきてね。英語を一生懸命勉強してね。しまいに向こうのキャンプに……

熊田：キャンプはどちらに？

稗田：下赤塚。池袋から東武電車で10分ぐらいかな、成増というところに。

熊田：お住まいはそのとき吉祥寺ですか。

稗田：私はそのとき吉祥寺。そこに行くと、4～5人のグループに絵を教えたの。非常に気の合う家の奥さんなんかいてね。僕、進駐軍に非常にそのとき感心したのはね、日本は中国なんか行ったら威張って大変だったろうと思ひますけど、向こうはそんなことなかったね。非常に民主主義というか。みんなジェントルマンでしたよ、私に対して。それからレッスン終わったら必ず旦那が車で送ってくれてね。で、もう一日中そこでしゃべっているから。どこそこ、って言って改札口で切符買うわけだけれど、つついね「池袋プリーズ」なんて言ってしまつてね。こいつキザな男だなと思っただろうね（笑）。

熊田：それぐらい入り込んでいらっしゃったんでしょうね。

稗田：それで、マーシャルさんっていう人なんですけれど、「一度〔アメリカに〕いらっしやい、いらっしやい」って言うもんだから。僕、やっぱりイタリアの寺院のプレスコ見たかったんですよ。フランスの美術館とね。アメリカには全然興味なかった。だけどあまりいらっしやいって言うもんだから、航空運賃を調べたところ、アメリカを回ってヨーロッパも回って日本帰ると、ヨーロッパ往復するのと、旅費がそんなに違わないんですよ。そんなだったら回ってこようって。〔おそらく1963年、〕アメリカも何カ所か回ってきましたけど、そんなにアメリカは見るところないけど、ニュー

ヨークの博物館、メトロポリタン、やっぱり凄いですね。ただあんまり凄くてね。街とは全然関係ないんですよ。だから二流でも良いからもう民衆と直結したような、そんなところ行きたいなという気はしましたけど。テキサスのあっちの方までいらっしやい、って〔マーシャルさんが〕言うから〔行った〕。ハチドリっていうハミングバード。どうしてハミングバードというのかな、と思ったけれど、飛びながら蜜吸うわけですよ。羽の音が「ウー」ってって歌のハミングみたいな、あれから来たっていうのもそこではじめてわかつたんですけれど。泊めてもらったところも、テキサスのサンアントニオというところでもしたけれど、土地柄は歴史の何にもないところでしたね。

熊田：メトロポリタンはすごいですね。

稗田：アッシリアの大きなひげ面の羽が付いた像〔人頭有翼獅子像か〕とか。

熊田：よくあんなもの持ってきたという感じがですね。

稗田：やっぱり僕は、イタリアが一番好きですね。

熊田：ジオットですか。

稗田：ジオットも良いけど、ポッティチェリの《春》なんかもね。

熊田：やっぱりプレスコ画と日本画とは近いものがありますか。

稗田：やっぱり似てますね。ギラギラしたベラスケスとか、ああいうのってあまり興味なかった。

熊田：それは体質に合わないんですね。

稗田：イタリアっていうのはやっぱり日本とドイツと同盟で一同に戦つたでしょう。だからあるところでは、イタリアの人っていうのは、僕が日本人だって知ると非常に好意を持ってくれる人もいましたね。ベニスでサンマルコ広場のお堂の上に大きな馬が3頭か4頭いる、あそこに登って見ましたけれど、そこを管理する人が「私は水兵で横須賀にいた」とかいいう人もいましたね。

\* \* \*

熊田：〔アトリエを見渡して〕そこに並んでいる本を見ると、なんとなくわかりますね。

稗田：このころ明治書房っていうのが売りに来ましてね。

熊田：洋書を扱っていた。

稗田：僕は日本画より油絵の絵描きの方が好きっていうかね。日本画っていうのは割合個性が少なくってね。狩野派とか土佐派とかにそういう個性のある絵描きっていうのはほとんどないからね。

熊田：特に伝統的な日本画はね。

藤本：いろいろな分野を広い視点で勉強したいから東京美術学校に行った、という文章を読みました（図2）。

稗田：綱領というのはなかったね。大阪だから京都の絵画専門学校〔京都市立絵画専門学校。現・京都市立芸術大学〕の方が日本画やるんだってらその方が近いけれども、私塾のような気風があるように僕も思っていたし、



（図2）《嵐の波止場》1942（昭和17）年 当館蔵  
\*東京美術学校在学中、第6回大日本海洋美術展への出品作

美術学校の方が彫刻とか油とかそういう色々な人がいるからそういう人と友達になれるだろうからそっちの方が良いんじゃないだろうかとと思って東京に来たんですけどね。

**熊田**：〔商業美術の仕事をしていた〕お父さんの勧めもあったと。やはり広い視点を持ってたんですよ。

**稗田**：〔父は〕アメリカからのライフとか雑誌を取り寄せて参考にして〔広告制作を〕やりましたからね。印刷技術を見てね、日本がアメリカと競争するってわかって、親父はね、「ああ、これは日本負ける」って。

**熊田**：その技術の差をよくご存知だった。

**稗田**：知識でしょうね。見たことはないけど。「百姓が三井三菱にかかっていくようなもんだ」と、そう言っていました。大阪からこれは逃げないと爆撃でやられる、って言ってましたね。その通りになって、その手前で壱坂に疎開しましたけれど。本当に、だけど、下手な戦争をしたね。もっと早く負けて手を挙げればよかったのに。

**熊田**：わかってらっしゃる方はたくさんいたでしょうね。

**稗田**：東京美術学校へ行っってね、油の先生は全然面識ないけれども。例えば、昔は木造の大きな部屋だったけれど、油絵の教室、偶然トイレ行くときに藤島武二にばったり会っってね。やっぱりその人がそこ通るとね、雰囲気違ったですね。それでね、僕、ああやっぱりこっちの学校来て良かったなと思った。僕はそんなこと全然知らなかったけれど、ミケランジェロの《昼と夜》とか、メディチ家の大きな石膏像〔1935年ボストン美術館より寄贈のミケランジェロ《メディチ家の墓碑》〕とか、展示室〔現在の大石膏室か〕に置いてあったのを見てびっくりしたね。

**熊田**：今も東京藝大のレプリカは有名ですね。今ではなかなか手に入らない貴重なものですよ。

**稗田**：あれもアメリカから寄贈されたものらしいね。

**熊田**：そうですか。

**稗田**：直接にそういう友達は、偶然野見山



(図3)《幻想那智》1979 (昭和54)年 当館蔵

〔晧治〕さんと知り合いになりましたけれども、そのほかにはあまり知らないけどね。そうやって違う科の先生にちらちら会ったり、そういうのは教えは受けなくても、良い学校だったと思っっているね。

**熊田**：いろんな人材がたくさんいらっしゃるから。

**稗田**：でも漆の生徒なんかは1年で4名しかいないんですよ。前後で20人しかいない、そういう小さな学校だったけれど。

＊ ＊ ＊

**藤本**：1967年に法隆寺金堂壁画の模写もされていましたが、学生時代にもそういう古画の模写などはされたりしましたか。

**稗田**：僕、模写はあまり興味ないんですよ。だけど、学校へははじめ非常勤で行くことになってね。吉岡〔堅二〕先生から言われてね。そのときに美術学校の日本画が主になって、法隆寺の再現の模写やるってことだったんで、やったんですよ。ただ、あれは焼けて〔現物が〕無いのに、京都の便利堂の黒白のコロタイプ印刷の上に胡粉で描き起こして、そこに方眼の色とか差していくんでしたからね。あまり面白くなかったですよ。

**熊田**：ちょっと職人仕事みたいになっちゃいますね。

**稗田**：法隆寺には親父が行ったときに、なんか皇族の人が来るんでね、扉を開けて偶然だったけれどちらっと〔壁画を〕見た。美術学校の学生のときに、古美術研究っていうので、2週間ほど京都奈良を回りました。そういうときに模写してる合間に見せてもらいましたけどね。そのときやっぱり上の方なんかを見るとね、緑青なんかね、チラチラぶらさがってるんですよ。そりゃやっぱり模写しないと、とは思ってましたけれどね。

＊ ＊ ＊

**藤本**：《幻想那智》(図3)の下の方の波に切金〔実際には切箔〕を使っていらっちゃったりとか、古画の手法などの研究は試みていらしゃったのですか。

**稗田**：そんなこと学校では教わらない。ホテルオークラのそういう切箔みたいなのを職



(図4)《帰り路》1981 (昭和56)年 当館蔵

人やっていた人に教わった。僕等のとき結城素明が〔東京美術学校の〕主任でね。ヨコオスマカズ〔宮本純一か〕、常岡文亀というふたりだけでしたね。結城素明なんか入ったときにちらっと来ただけで、あと一回も会ってない。僕あの人の絵、好きじゃないからね。あんな絵より、油絵だったらみんなやってることだね。あんなどこが良いんだろうと思って。だから先輩の描いているのを見よう見まねでやってみましたけどね。

**藤本**：金や銀、プラチナを使うときに意識されていることはありますか。

**稗田**：あんまりそれに頼りたくない。けど、ちょっとこういうことも知ってるぜ、っていうことを利用したいと思っってね。ただ、プラチナは固くて切りにくいんです。だから僕はあれは使わない。月見草を描いたもの〔《花精》1973年、東京藝術大学蔵〕、これしかプラチナは使っていない。こういうことを言ったらがっかりするかもしれないけれど、プラチナのような鈍い光、銀箔じゃ強すぎるっていうとき、僕はアルミ箔を使っている。アルミ箔だったら割合切りやすいね。切るのは、鹿の皮の上で竹のへらで切る。

**熊田**：すごく難しいですね。

**稗田**：そういうのも学校では習わないですよ。学校出でから、ホテルオークラのそういう装飾やっている人にちょっと聞いた。

**藤本**：最近〔2015年〕創画展へ発表された《微風》という作品にも、《帰り路》(図4)と同じように後ろ姿の女性が描かれていますか。

**稗田**：「傷ついた気持ち」なんていうこと〔昔に〕書いたけどね。一日終わってね、僕なんか駅の近くの商店街とか歩いているね、サラリーマンなんかね、その一日行くときの姿と、終わって駅からパラバラと出てくる、随分心境違うと思う。僕はね、一日終わって楽しいこととかね、ウキウキするようなそういう人もいるかしらんけど、僕はそういう人は興味ないんです。縁が無い。やっぱりその日に自分が傷められたとか、失望したとか、そういう人には興味を持ってけども。おめでたい人はいいんです。だからそういうことで、そういう人相手に、表現したいと思っってね。帰り道に



(図5)《夏去る》1981 (昭和56)年 当館蔵

歩いている人が傷ついたんじゃないかってね。なにか色々複雑な気持ちを持ってね。そういう気持ちで描いたんでね。平和だとか、楽しい人は僕は興味ない(笑)。

**藤本**：《帰り路》も線路の向こうにある世界を想像させますか。

**稗田**：現象だけじゃなくて、その人の気持ちみたいなものも描きたいと思っってたんだけどね。《夏去る》(図5)っていうのも鎌倉の方へ暑い日に写生がでら大学院の学生5、6人と一緒に行ったんだけどね。ウインドサーフィンの帆柱みたいなのがね、たくさん立っている。ああいうの面白いなと思っただけどね、ちょっとそれを描く自信がなかったんだよ。だからそこから展開して、女性がひとり過ぎた夏を振り返っている、というようなのにしたんだけどね。裏話をすれば、あの服装の模様はね、あの頃銀座の裏通りを歩いていたらしョーウィンドウにあの模様のね、薄手のがかかっっていて、これ面白いなと思っって。この洋服きた女と鳥と組み合わせで描いたらどうかな、と思っって、それで変わっっていったんですけどね。あれも偶然なんだけどもね。

**熊田**：洋服も買って帰られたんですか。

**稗田**：生地をね。

**藤本**：女性の服のディテールにこだわられていらっやいますね。

**稗田**：そうですね。模様がなければ、デザインみたいなね。

＊ ＊ ＊

**稗田**：〔1963年の洋行について〕話が飛ぶけれど、教えていた軍属の人、ワシントンにいて、空港に迎えに来てくれてね。「僕ホテル行くから」って言ったら、「ホテルへ行くのも良いけど、あんたのため部屋開けたから気に入らなければホテル行きなさい」と、それでそこへ泊めてもらって。その人がね、向こうで司法省の偉い人だったらいいんでね。「近くのリ別荘に行くから自由にこの家を利用してね、一緒に行くなら一緒に行こう」と。僕一緒に行ったんですけどね。そしたら2日目にその人が呼び出しを受けてね。どうしたのって聞いたら、「今パーミングハムで黒人騒動が起こった、それを鎮めに行くんだ」と。これはアメリカも大変だと。アメリカも自由で平和な国だと思っっていたけど、とんでもない悩みを抱えているんだなと思いましたね。

**熊田**：特に先生がいらっちゃった頃は、まだ黒人差別がきつい時代ですよな。

**稗田**：〔その人が〕ワシントンで美術館へ車で連れて行ってくれて。「ホワイトハウスを見たいか」と言われて、「僕は興味ない」と言っただけれど、「ボスがいるから会っていくか」と言うから、それも断るのも何とものとなって、行ったらジョン・F・ケネディの弟のロバート・ケネディがいた。「自分の娘の描いた絵だ」と言っって、これぐらいのわら半紙に鉛筆で描いたのを画鋳で部屋に3枚ほど留めていた。ああいう庶民的なね。日本の国会議員だったら、額へでも入れて。そんなことしないでね、画鋳で留めてね、鉛筆画を。形式張らないで、なかなか良いなと思っましたね。

＊ ＊ ＊

**藤本**：学校で教えていたときに、次の世代の人たちに伝えたいと思っっていたことなど、何かおありでしょうか。

**稗田**：僕はあまり絵って教えるものじゃないと思っっていて。感じ取るものだと思うですよ。

**熊田**：先生自身があまり人に教わった絵じゃないですよな。

**稗田**：扉をたたく人には話すけど、そうでない人はそのままで良いと思っんですけどね。僕の学生時代、結城素明なんか1回しか会っってない。教師との交流何もなかった。僕はかえってそれの方がよかったと思っつ。だから僕はなるべくつかず離れずね。あまり込み入ったことは。ただ相談には乗るけどね。こうしなさい、あしなさいと言うことは言わなかったつもりだけどもね。

**藤本**：稗田先生と、山本丘人先生とのご関係もそのような感じだったのですか。

**稗田**：それはまた別。学校にいたときは先生との交流は全然なかった。〔東京美術学校を卒業後〕大阪に一旦帰ったんですけどね。自分のいた工芸学校にちょっと勤めたけれども、こんなこといたらあかんと思っつ。自分が埋もれてしまうと思っつこち出てきたんですけどね。美術学校を出て2年間の間には研究室があっつそこに残る噂を聞いていたからね。だけど頼る先生が全部変わったからいいんですよ。山本丘人っていうのは、僕らの学年でちょっとグループ展やったときにね、芳名録に名前があっつのを思い出してね。そんな縁だけで学校の教務に行っつ山本さんのところを調べて教えてもらっつ、「そういう勉強したい」って言ったらね、「私の一存でそんなことわかんないから、いついついらっやい」って。それで行ったらちょうど奥村土牛さんがいてね。「あんたこんな爆撃ひどいときだから郷里帰りなさい」って言われて。せっかく出てきたのに、そんな帰れないって(笑)。それから丘人さんが「もし何だったらときどき遊びに行っつやい」って言っつくれたから、それで行けるようになったんですよ。山本丘人の絵がどうかこうかっつっていうのは、僕はあまり知らなかった。僕は山本丘人の絵っつっていうのはゴツゴツしてね、あんまり好きじゃなかった。人柄は非常に尊敬できる人だった。それで、創造美術っついう団体が出来て、山本丘人の絵よりは吉岡堅二だとか秋野不矩とか、橋本明治、そんな人の絵の方が好きだったからね。そこへ出したんですけどね。そこでね、今までと違うものをちょっと描かないと駄目だったので、その頃アルバイトに子供の挿絵描いてたんですよ。だから童画っついうのも良いからね、今までと違うもの描こうと思っつ。それ〔1948年第1回創造美術展へ出品の《花花》〕が偶然当たっつ(笑)。賞〔奨励賞〕になるなんて思わなかったから、入選発表なんか美術館のところに勇気が無くて行かなかったですよ。だから新聞にね、小さく2行ぐらい受賞者の名前が出ていてびっくりして。それで、吉岡堅二が妙に僕に気を遣っつてくれて。うちの会〔創造美術〕はそういう誰々の弟子だからとっつて封建的なことが全然なかったから、随分助かりましたね。それで〔1967年の〕法隆寺の模写のことで僕が〔東京〕

藝大に来た方が学校が引き受けるのに都合が良いっつので、吉岡先生も僕を呼んだんですよ。そのときも全然吉岡さんが山本さんに相談することも何もしなっつやっつし、僕も山本さんに「こういうことになりました」というのは後で報告しようとは思っつだけども。すぐに駆けっつていくようなことはしなかった。山本さんところへ行っつているお弟子さんでね、そういうことを画商から聞いて、「稗田失礼だ、山本さんに相談しないっつのは」と言われまっつたけども……だけど、法隆寺の模写っついうのは面白くなっつたですよ。地面のカビみたいなね、そういうことがうまく表現されないとね、見栄えしない。それで、ただずっつと点々で埋めていくんですよ。

**熊田**：本当に職人仕事ですよな。

**稗田**：点々で埋めていくとね。あのときは十何人で引き受けましたね。そうすると割合みんなこう癖がなくて揃うからっつて点々でやるんで。麻田〔鷹司〕さんも僕もそういうの初めてだった。だからなんか麻田さんも気合い入らない、あんまり好きじゃなかったからふたりでこぼしながら仕事でまっつたけどね。あのときの古壁は残っつてますからね。飛天の。ちよっつと味は全然違うけれど、古壁はいいですよ。本当に壁画っつっていうのは日本じゃほとんどないですからね。ヨーロッパじゃ壁画は随分あるけどね。本当はだからっついう壁の圧迫感っつうか、迫力が随分大きな魅力ですからね。それをあんな紙へ描いっつて〔雰囲気が出るのは無理ですよ。本当は漆喰の壁にこうやっつて描いっつたほうがいいでしょうね。

＊ ＊ ＊

**藤本**：ご自身の作品で一番思い入れの強い作品はどちらでしょうか。

**稗田**：残念ながら、それないの。

**熊田**：これまでではなく、これからなんですよな。

**稗田**：人にもよるけどね、僕は描いたあと自分の作品に関心がないですよな。

**熊田**：次の方に行かれる。それはもう、ずっつとそれをやっつていらっしやるから、新しい作品が出来てくる。

**稗田**：非常に愛着を持っている人もいます。それはそれでまた、いいんだけどね。僕は描いたら全然っついうほど、興味ないですよな。

**熊田**：制作している過程の方が重要なんですよ。完成させていくっついう過程の方が。

**稗田**：やっぱりやるにはそのときの全力でやりますけどね。あとはそれ以上自分ではできないから仕様がなっつという。

**熊田**：最後ここで止めよう、っついうのは。それは一番難しいことだと思っつますけれど、自然とそうなっつられますか。

**稗田**：それは一番難しいですね……

＊ ＊ ＊

**熊田**：ますます良い作品を期待しております。どうもありがとうございました。

**稗田**：ありがとうございました。

(終)